

水性の夜

船越素子

一番星がのぼつて

教え子が物語をとどけに来た

静かな彼女だ

うつくしい夕暮れの風とともに

静かにてわたす

物語も静かに

静謐な室内で綴じられる

暴発も 静いも 騒乱も

ここでは

何もかもが

呼吸の音も消えいるように

霧散していく

送り出された

ふたりの少年は

はるか時空をこえ

彼らのスペースシップがすれ違い

たがいを呼びあう

彼女の物語は

痛ましいほどに美しい

やさしい人々が

やさしきの傷を負い

レモン水のかけられた

かきごおりのように溶ける

水性の夜の

再生や降臨が

その先にあるのか

誰もとわない

だから ゆっくり

ページを繰る

あたたかな飲み物と

膝掛けを用意し

ひとり

星降る夜の

星をさがして

教え子に届けようと

思いついたのだ